東京の教育

左 藤 健 二素行から松陰へ―士道の継承―

山鹿素行の著書に『武教小学』といふのがある。『武教全書』といふ大著の言はば「序ある。『武教全書』といいである。『武教全書』として書かれたものである。『武教全書』といいのである。『武教全書』といいのが、山鹿流兵学師範であつた吉田松陰は、「南遍と無くこの書を読み、藩主の前でも講義し、素行先生の兵学また士道を学んだのである。

『武教小学』は、その本編たる『武教全書』であつた。

「安政三年丙辰の八月二十二日という日を(川口雅昭氏訳注)で少し読んでみよう。門弟達にどのやうなことを言つたか。口語訳松陰は、その『武教全書』を講ずるに際し、

復刊第九号

東京都教師会発行

、事務局)横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三一○

なさい。 うな意味があるか、それぞれしっかりお考えうな意味があるか、それぞれしっかりお考え全書』の講義を始めるということは、どのよ定め、皆さんを集めて山鹿素行先生の『武教

私も皆さんも、天皇をいただく我が日本国 に生を享け、その中でも私共は武家、武士で ある以上、その職分である武道に心を尽くし をある以上、その職分である武道に心を尽くし ないかが、心を尽くしてその本分に励む者 はいないが、心を尽くしてその本分に励む者 はいないが、心を尽くしてその本分に励む者 とその御恩に報いる者は、昔から現在に至る とその御恩に報いる者は、世から現在に至る とその御恩に報いる者は、世から現在に至る とその御恩に報いる者は、世から現在に至る

のやうに述べるのである。松陰は、このやうに語り始めた。そして、

が焼けただれるほど繰り返し繰り返し説き続い焼けただれるほど繰り返し繰り返し説き続いたった考えを排除し、古代の貴く清らかな生きった考えを排除し、古代の貴く清らかな生きった考えを排除し、古代の貴く清らかな生きった考えを排除し、古代の貴く清らかな生きったきである。この二つのことは、素行先生が、世と素行先生の『配所殘筆』を拝読した時、口と素行先生の『配所殘筆』を拝読した時、口には、素行先生が、世に関する。

を出版したためである。かといふと、朱子学を批判した『聖教要録』筆されたものであるが、なぜ赤穂に流された『中朝事実』は素行が配流された赤穂で執

戦布告である。 といりません しっかりません といっこ とであつた。素行は、その序文で次のやうとであり、「実践」とは『聖教要録』出版のとであり、「実践」とは『聖教要録』出版のをであり、「実践」とは、ここではどのやうとであった。素行は、ここではどのやうとであった。
は気にせず」真実を伝へるといふこかすません。

り。漢唐の訓詁、宋明の理学、各々利口饒舌「道を説きて人を 謬 る者は天下の大罪な

にして、 聖人をして塗炭に坐せしむ、 惑ひを弁ぜんと欲して、 惑ひ愈々深 最も畏るべ

導く者は天下の大罪人である。 り、こんな畏るべきことはない、と言ふので 人に塗炭の苦しみを味ははせてゐるのであ 人の惑ひを晴らさうとして益々惑ひを深く らと利口さうな理屈を言つてゐるが、その実 どといふものは、それぞれみな何やらべらべ の注釈書、 人としての道を説きながら人を誤つた道に 聖人の考へと違ふことを伝へることで聖 宋や明の時代の理学(朱子学)な 漢や唐の時代

のことである。 松陰が弟子に伝へようとしたことも、当にそ を出版する筈がない。まさに命懸けで真実を ば、身の危険を顧みずこのやうな危険な著書 声は天下に鳴り響いてゐた。保身第一であれ 述べ、世の迷妄を晴らさうとしたのである。 自ら志す所は、皇国の大恩に報い、武門武士 て他人に接すべき身に非ざれども、 て名を連ねてをり、儒者、兵学者としての名 職分を勤むるにあり。此の志は死すと雖も 当時素行には多くの大名や幕臣が弟子とし 敢へて変ぜず」。 松陰日く、「余は罪囚の余に 其の独り

0

育

を以て弟子達へ伝へられ、 死すと雖も吾れ敢へて変ぜず」といふ決意 十年を経て、松陰の肺腑を貫き、「此の志 行の死をも恐れぬ真実追求の熱誠は、百 時代を大きく動か

五十年といふ節目の年である。 そして迎へた明治維新、 今年はそれから百

一日に一度、

未明に少し離れた閼伽井に水を

(会員)

Ŧ 日 П 峰 行 の 教

井 雅 和

る。 てゐる行場は全国にいくつかあるやうであ 回峰行といふ修行があり、これが行ぜられ

行がある。 中で行ふ、一千日の修行である。 その一つ、天台宗比叡山延暦寺に千日回峰 無動寺谷の明王堂に勤める僧が山

る。 も提灯の灯を頼りに山中の獣道のやうな坂を 続した日にちを天候に関はりなく続け、 勿かれ、 これを 一年間に 百日又は 二百日、連 余りを走る競技よりも短いではないかと言ふ きは懐中した紐か小刀で自裁することにな 途中で止めるわけにはいかない。挫折したと 発して明け方戻るまで、これが毎日である。 標高差は六百メートルになる。深夜に庵を出 る堂塔、神木、祠では必ず礼拝して経を読む。 駆け上がり走り降り、 ルの山道を歩いて行ふ。四十二キロメートル 一日に七里半といふから約三十キロメート 途中二百六十箇所もあ しか

断食断水不眠不臥で不動明王の真言を十万遍 読み続ける。 ふ行がある。明王堂に九日間参籠し、その間 数年で七百日になつたその日に堂入りとい 外に出ることは許されず、

> 取水を終へる。 来ない。 捧げるもので自らは決して口にすることは出 担ふ体力もなく、 れは助僧によつて確かめられる。最後は桶を 汲みに行くのみである。しかもその水は仏に しかし、その水が減つてゐてはならない。こ 喉が渇いたら唇を湿すことはよい、 伴僧に天秤を支へて貰つて

これで当行満阿闍梨となる。 その僧の姿はまさに生きた不動明王に感じら れ、思はず拝まないではゐられないといふ。 が、真夜中にも拘はらず大勢の信者が迎へる。 堂入り九日目の満行になつて外に出るのだ

ある。 り、更に二十一里の京都大回りである。洛中 市街を回る行もある。行程十五里の京都切回 までに十数時間から殆ど丸一日かかるさうで 洛外の社寺を巡拝して山に帰るのだが、途中 に数年、三百日続く。今度は山を下りて京都 に信者がゐれば加持をしてやる。戻つてくる さて、 行はここで終はつた訳ではなく、更

栄誉であると同時に玉体加持と国家鎮護を修 て御所へ土足参内が許される。この行者への する大阿闍梨としての責務でもある。 が、北嶺大行満大阿闍梨と称される。さうし この堂入りを挟む一千日の行を終へた者

七十五日といふ。 ただし一千日といふものの、 実際には 九百

ない。先年遷化した酒井雄哉大阿闍梨は、 この行を終へた僧は戦後でも十数人しかゐ

が居るはずだ。 大阿闍梨となつた。そして今も続ける修行僧信長の焼討ちの後の記録に残る五十一人目の堀浩元といふ一山住職の行者が達成し、織田日回峰行を二回成し遂げた。昨年九月にも釜

を我々は読み取らねばならない。いふのか。実はここに大きな意味があることと述べた。それでは残りの二十五日は何だとく、この一千日は実は九百七十五日である

平成二年に満行した光永覚道大阿闍梨によれば、一千日と区切ることによつてそこで行れば、一千日と区切ることによつてそこで行れば、一千日と区切ることによってそこで行れが一生続くのである。あと二十五日はその後の一生をかけて修行しなければならない。これからの毎日が「あと二十五日」なのであるとれが一生続くのである。そのために九百七十九が一生続くのである。そのために九百七十九が一生続くのである。そのために九百七十九が一生続くのである。そのために九百七十九が一生続くのである。そのために九百七十五日を一千日に満行した光永覚道大阿闍梨によりの二十五日は一生と同じ意味を持つのである。

育

千年続くこの行が、齎す経験則といふものでに対する二十五日間なのである。これは、一けてゆかないやうにする、これがこの一千日ときである。満つれば缺くるとはいふが、缺りがついたと思ふときはもはや凋落に向かふりがついたと思ふときはもはや凋落に向かふときである。満つれば缺くるとはいふが、缺ときである。満つれば缺くるとはいふが、缺りがついたと思ふときはしていることをはいいたが、はいかしていたと思いないが、はいかしているといいである。

である。 あらう。盈虚思想をしつかり見定めてゐるの

ひ続けることが必要である。あらう。常に目標を先に設けてそれに向き合が大切である。例へば学習などもその一つでいくつか持つてゐるが、それにはこの考へ方いくか持つてゐるが、それにはこの考へ方

まは、千日回峰行の中の「二十五日」こそ を他のことに使つてしまつたのである。「ゆとり」といふものではなかつたかと思 い前「ゆとり数育」と称されたものがあつ た。そこでは学習内容を何割か削つて生み出 た。そこでは学習内容を何割か削つて生み出 た。そこでは学習内容を何割か削つて生み出 た。そこでは学習内容を何割か削つて生み出 た。そこでは学習内容を何割か削つて生み出 とり教育」の「ゆとり」なのである。 ない、半日回峰行の中の「二十五日」こそ 実は、千日回峰行の中の「二十五日」こそ

社会は大切なものを失つたといへる。るものによつて、ある年齢層の個人、並びにかつて我が国に蔓延した「ゆとり教育」な

(会員)

戦前の中学国語の教科書を読む(四)

年修正七版である。この教科書は、国文十二年初版で、手許にあるのは、昭和十に載るものである。この教科書は、大正[次の文章は、『現代国語読本 巻一』

巻一は中学一年前期のものである。〕た。全十巻から成り、各学年二巻配当。教科書として大変評価の高いものであつ単独編輯として知られ、戦前の中学国語学者、文部省教科書編纂官八波則吉氏の

菖蒲の節句」 島崎 藤村

国民の記念日でもなく、氏神の祭礼でもなる。国民の記念日でもなく、氏神の祭初があるのは嬉しい。――女の児のためには三月のためにあるのは嬉しい。――女の児のためのためにあるのは嬉しい。――女の児のためないまでは三月の桃の節句があるのは嬉しい。

を祝ふためにあるものは鍾馗や鬼や金時や桃楽隊のやうな五人囃子の代りに、五月の節句 節句を祝ふものは室内にも屋外にもあつて、 子供の心を楽しませるやうなあの飛揚。 かゝる金と赤と黒とのあの色彩、動きを悦ぶ 鱗を描いた魚の形、長い尾、大きな眼、空に あちこち屋根の上に鯉幟を望むのは楽しい。 やうにも見える。狭苦しい町の中にあつても、 鯉幟は、恰も子供の国をそこに打建てたかの にも合唱でも始めさうな雛や、 具である。あの三月の節句に取出されて、今 にしたい。そこに飾られる一切のものは皆玩 代からの遺物であるといふやうな理窟は抜き 0) 太郎などの行列である。五月の空に高く翻る 五月人形の多くが、武勇を誇とした旧 た一くと風に鳴る鯉幟の音である。 心をも子供の心に返すものは、 古風な少年音 大人

懐かしい。 軒にふく菖蒲までがお伽話の情調を誘ふのも

あるが、私達の周囲はもはや若葉の世界であ 日があつて、雨でも降れば袷では寒いことも 節の一つである。遠い山々へはまだ雪の来る を放つ五月の初は、一年の中の最も楽しい季 にも遅く、山吹や藤や満天星などの花が香気節の感じが深い。桃・桜は過去り、椿や木蓮 て来る。 る。この好い時候に楽しい菖蒲の節句がやつ 五月の節句を迎へる頃は、 何と言つても季

みづくしい葉の色も好ましい。あれを軒に みだし、あの葉が私達の肌などへぺたりと附 浮いて居る中を掻分けて湯槽に浸るのも楽し かけるといふことも優しい風俗だと思ふ。一 いた時の心持も悪くない。 温めて呉れるのも嬉しい。青々とした菖蒲の 酔はせるばかりでなく、私達の身をも心をも 年に一度の菖蒲湯がたつて、あの香気が人を 鋭いところのある葉の形も好い。 は おのづから男の児にふさはしい。一ふし 桃の花が女の児にふさはしいやうに、菖蒲 爽かで

教

京 0

何がなしに懐かしい思を誘はないものはな に蒸された香を嗅いだ子供の頃の心持は、今 鄙びた処で作られるものほど好い。あの細長 どと数へて来ると、五月の節句を祝ふもので、 だに忘れられない。 笹の葉の巻付けてあるのを解いて、 私達の少年時代はまだ軒の菖蒲にも残つ の香は幼い日の香である。 粽の外に、柏餅・赤飯な 粽ばかりは 、青い色

> て居るやうな気がする。 (原文の漢字は正字。送り仮名、 ルビは原文通り)

〇研究大会主題の設定について

です。 ました。 検討―何を得て、 十八回教育研究大会は来たる8月4日、 に開催されます。 に「アルカディア市ヶ谷 (私学会館)」を会場 既報の通り、平成三十年度日本教師会第五 以下は【主題設定の趣旨】(要旨) 研究主題を〈近代教育の再 何を失ったか―〉に設定し 5 日

ったのか考えてみたい。 討することにより、 多くの問題を抱えたままである。そこでこの 体性が回復されたが、歴史教育などは、まだ 基本法は現行のものに改正され、我が国の主 等、GHQの指導の下に制定された教育基本 科の廃止、漢字制限や現代仮名遣いへの変更 我が国は六年八ヶ月という長きにわたって連 かし、昭和二十年大東亞戦争の敗北により、 おける我が国教育の基本理念が確立した。し れ、明治二十三年の教育勅語により、近代に うな意味をもつか。明治五年に学制が発布さ の年である。 節目の年に、 法に基づく戦後教育が始まった。その後教育 ・三・三制や男女共学制の施行、修身や地歴 を余儀なくされた。教育勅語が廃止され、六 合国軍に占領され、その間に教育制度も変更 [今年は明治改元から百五十年となる節目 教育界にとって、それはどのよ 明治から始まる近代教育を再検 我々は何を得て、 そこに今後我が国が

〇日本教師会「日本の教育」の原稿募集 むべき道 のヒントがあるはずだ。」

れます。 ださい。 この夏の教育研究大会の紀要として発行さ 日頃の実践、 研究の成果をお寄せく

- 内容
- ③その他のテーマによる論文 ②研究主題にかかわる論考、 ①記念講話、実践発表者のレジュメ 実践報告
- 体裁

③「一太郎」又は「ワード」 ②字数 見開き2頁~4頁 ① B 5 判 30字×24行×2段 で 組

④締切 ⑤付先 email: hahideo@nifty.com 七月二十日(木)

をお待ちしています。 下さい。また、写真や図版はご相談くださ 載することもできます。 ただしこれより長いものは数次に分けて掲 0 仮名遣いは古典現代いづれかに統一して 字数は三千字程度以内でお願いします。 「東京の教育」への会員の皆様のご投稿

ルの送り先は次の通りです。 事務局アドレス(佐藤) 送り先は題字下にあります。 また、

komasato@juno.ocn.ne.jp